

■ 本文

いんじ安元三年四月二十八日かとよ。風はげしく吹きて、静かならざりし夜、戌の時ばかり、都の〔①〕東南より火出で来て、西北に至る。はてには朱雀門・大極殿・大学寮・民部省などまで移りて、一夜のうちに塵灰となりにき。火もとは樋口富の小路とかや。舞人を宿せる仮屋より出で来たりけるとなん。

吹き迷ふ風に、とかく移りゆくほどに、扇を広げたるが〔②〕ごとく末広になりぬ。遠き家は煙にむせび、近きあたりはひたすら炎を地に吹きつけたり。空には灰を吹き立てたれば、火の光に映じて、あまねく紅なる中に、風に堪へず、吹き切られたる炎、飛ぶがごとくして一二町を越えつつ移りゆく。その中の人、うつし心あらんや。〔③〕あるいは煙にむせびて倒れ伏し、あるいは炎にまぐれてたちまちに死ぬ。あるいは身一つ、からうじて逃るるも、資財を取り出づるに及ばず。七珍万宝さながら灰燼となりにき。その費え、いくそばくぞ。

そのたび、公卿の家十六焼けたり。まして、その〔④〕ほかは数へ知るに及ばず。すべて都のうち、三分が一に及べりとぞ。男女死ぬるもの数十人、馬・牛のたぐひ辺際を知らず。

人のいとなみ、皆愚かなる中に、さしも危ふき京中の家を作るとて、宝を費やし、心を悩ます事は、〔⑤〕すぐれてあぢきなくぞ侍る。

(注) いんじ＝過ぎ去った。「去にし」の音便。戌の時＝午後八時ごろ。樋口富の小路＝樋口小路と富小路の交わるあたり。舞人＝舞をまう人。七珍万宝＝あらゆる財宝。いくそばく＝どれほど。公卿＝高位の貴族。あぢきなし＝つまらない。むなしい。

■ 設問 (全21問)

1. 「いんじ安元三年四月二十八日かとよ」の「かとよ」は、どのような気持ち・意味を表す表現か。簡潔に説明せよ。
2. 「静かならざりし夜」の「ざり」「し」について、それぞれの助動詞の意味(種類)を答えよ。
「ざり」
「し」
3. 傍線部〔①〕「東南」・「西北」とあるが、火はどの方角からどの方角へ燃え広がったか。本文の方角の語をそのまま用いて答えよ。
4. 「一夜のうちに塵灰となりにき」の「に」「き」は、それぞれ何の助動詞か。終止形(基本形)で答えよ。
「に」
「き」
5. 「火もとは樋口富の小路とかや」の意味として、火事の出火元(火元)はどこであったと述べられているか答えよ。
6. 傍線部〔②〕「ごとく」について、次の小問に答えよ。

この語の文法的な名称（品詞名）を答えよ。

「扇を広げたるがごとく末広になりぬ」を現代語訳せよ。

7. 「その中の人、うつし心あらんや」とあるが、「うつし心」とはどのような心か。意味を答えよ。
8. 「うつし心あらんや」の「や」は、どのような意味・用法か。文末の意味を踏まえて説明せよ。
9. 傍線部〔③〕「あるいは煙にむせびて倒れ伏し、あるいは炎にまぐれてたちまちに死ぬ」を現代語訳せよ。
10. 「七珍万宝さながら灰燼となりにき」の「さながら」の意味を答えよ。
11. 「その費え、いくそばくぞ」とは、どのような意味か。現代語訳せよ。
12. 「公卿の家十六焼けたり」の「たり」の文法的意味（種類）を答えよ。
13. 傍線部〔④〕「ほか」の読みを、現代仮名遣いのひらがなで答えよ。
14. 傍線部〔⑤〕を含む最終段落で、作者は人のどのような営みを「愚か」と述べているか。具体的に説明せよ。
15. 傍線部〔⑤〕「すぐれてあぢきなくぞ侍る」について、次の小問に答えよ。

この一文の中で係り結びの関係を作っている係助詞を抜き出せ。

その係助詞を受けて結びとなっている語を抜き出し、文法的にどのような活用形になっているか（活用形の名称）を答えよ。

16. この大火によって、都のうちどれくらいの範囲が焼けたと本文に述べられているか。本文中の語句を用いて答えよ。
17. この最終段落に表れている、作者・鴨長明のもの見方（思想）を、漢字三字で答えよ。
18. 『方丈記』の作者名を漢字で答えよ。また、その読みをひらがなで答えよ。

漢字

読み

19. 『方丈記』は、ある文学ジャンルの作品である。そのジャンル名を漢字二字で答えよ。
20. 『方丈記』とともに「三大随筆」と呼ばれる作品が他に二つある。その作品名を二つ答えよ。
平安時代に清少納言が書いた作品
鎌倉時代末期に兼好法師（吉田兼好）が書いた作品
21. 『方丈記』の有名な書き出し（序段）の最初の一文を、知っている範囲で書け（「ゆく河の流れは…」に続く形で答えよ）。